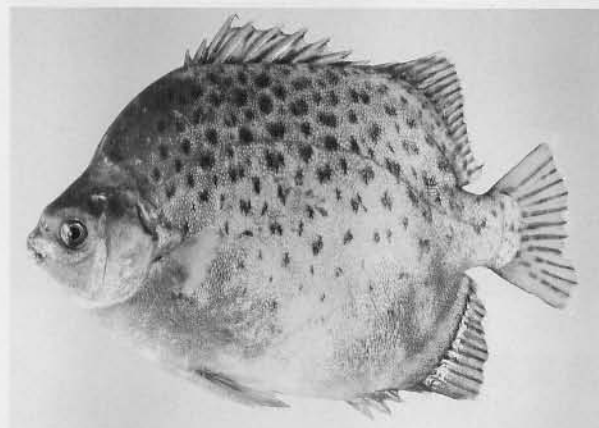


群く来き

第 64 号

平成20年 3月21日発行

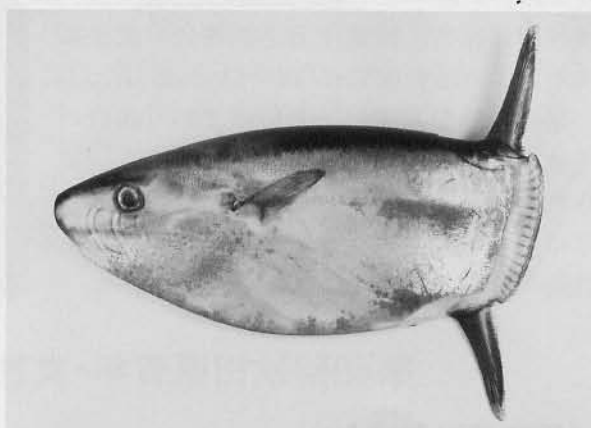
秋田で初めて確認された魚類



クロホシマンジュウダイ

8月28日 潟上市沖定置網 全長262mm 体長227mm

和歌山県以南のインド・太平洋に分布し、稚魚、未成魚は河口域や汽水域に出現することもある。体高は高く側偏しており、銀白色で、体側上方には大きな黒斑が散在する。頭部背縁は眼の上部がくぼむ。棘は強く刺されると痛むという。日本海側では、京都府野原で記録がある(1995.12.11)。今回の個体は秋田県初記録であるとともに、本邦北限の記録と推察される。



クサビフグ

12月23日 潟上市打ち上げ 全長398mm

フグ目マンボウ科クサビフグ属に属する。マンボウより体高が低く細長い。胸鰭は伸長し、舵鰭(尾部の鰭)は切り落とされたように直線的。琉球列島以南の世界中の熱帯域に分布する。今回の個体は秋田県初記録であるとともに、本邦北限の記録と推察される。本個体は、水温が低下した(12月23日の男鹿市船川港台島地先水温10.3℃)ことにより打ち上げられたと推察される。

「珍しい魚」には、2種類あります。その魚自体が珍しいもので、国内外で採捕記録がない魚が本県沿岸で見つかったというもの。もう一方は、その魚は秋田より南(あるいは秋田より北)では普通であるが、分布の南限(あるいは北限)を越えて秋田県沿岸で発見されたものです。あるいは、普通は沖合や深海で採捕されるものが沿岸で採捕される場合や例年と比較して異常に漁獲量が多い(あるいは少ない)場合なども特異現象と言えるでしょう。最近、地球温暖化、大型クラゲの異常発生、レジームシフト(大規模な海洋環境変動にともなう魚類の資源変動)などの言葉をよく聞きますが、その実態については解明されていないことが多いのです。「珍しい魚」や特異な現象を記録することは、これら環境の変動の予兆を把握する意味で重要と考えられます。

2007年に本県沿岸で採捕された「珍しい魚」として、上記写真の2魚種のほか、

- | | | | |
|----------|-------------|----------------|-----------------|
| ①マルカワカジカ | 2007年 4月16日 | 男鹿半島沖280m底びき網 | 体長178mm |
| ②オンデンザメ | 2007年 4月19日 | 男鹿半島沖280m延縄 | 全長193cm |
| ③サギフエ | 2007年 5月22日 | 男鹿市入道崎沖100mさし網 | 体長118mm |
| ④イセゴイ | 2007年 8月28日 | 潟上市沖定置網 | 全長541mm 体長438mm |
| ⑤ナルトビエイ | 2007年 8月28日 | 男鹿市沖定置網 | 全長982mm 体長251mm |
| ⑥イタチザメ | 2007年10月 4日 | 男鹿市沖さし網 | 全長183cm |
| ⑦モロ | 2007年11月 9日 | にかほ市金浦沖定置網 | 全長249mm 体長227mm |
| ⑧ホシフグ | 2007年11月28日 | 久六島沖釣り | 全長398mm 体長321mm |

などがありました。

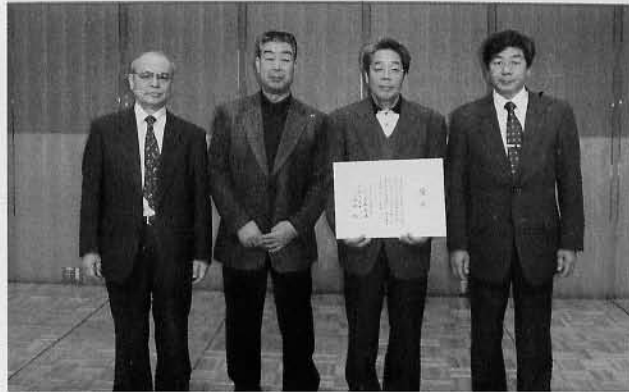
貴重な情報を提供していただいた漁業者や関係者の皆様に感謝します。また、今後とも「珍しい魚」が獲れたときは、水産振興センターまで御一報をお願いします。

秋田県青年・女性漁業者交流大会開催

昭和37年の第1回漁業技術交換会から数えて46回目となる「秋田県青年・女性漁業者交流大会」は、約120名の漁業関係者が集まり、平成20年1月16日、秋田市の県生涯学習センターで盛大に開催されました。大会では、漁業者グループによる研究活動発表、視察研修報告、漁業士会活動報告、水産振興センター研究成果報告が行われました。

研究活動発表では、岩館磯まわり組合の活動が最優秀賞となり、3月に東京で開催された全国大会に出場しました。全国大会ではその活動が高く評価され、JF全国女性連・全国漁青連会長賞を受賞しました。

全国青年・女性漁業



第46回秋田県青年・女性漁業者交流大会の概要

【研究活動発表】

◎アカモク増殖に取り組んで～ギバサの森づくり～◎

岩館磯まわり組合 大高美紀夫

秋田県の沿岸域に生育しているアカモク(県内では「ギバサ」と呼ばれている)の積極的な増殖を目指して、新方式の「パイプ基質+シャワー育成法」で6月から種苗生産を実施した。種苗を沖出した海底で天然アカモクの着生が確認され、増殖効果が一層向上できると考えられた。生育したアカモクにはハタハタの産卵が認められ、地先の磯根漁場を自分たちの力で健全に維持できる手応えが得られた。

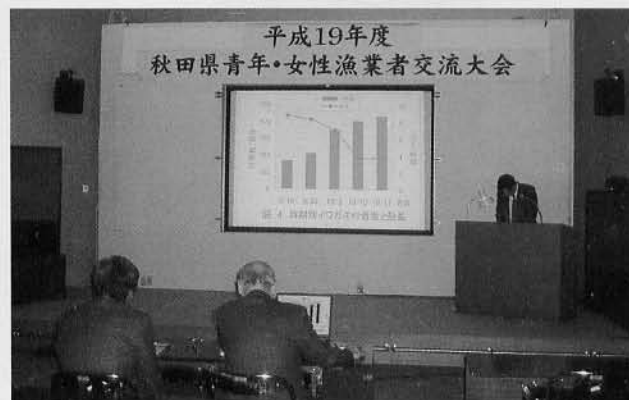


◎戸賀湾の恵みを生かした漁業への展開

～てごたえあり 天然イワガキ種苗生産～◎

戸賀湾養殖研究会 敦賀 強

近年、全国的に需要が増加傾向にあるイワガキについて、養殖の元となる種苗の天然採苗に取り組んだ。9月中旬から10月中旬まで試験を行い、天然採苗できることが明らかになった。研究会員が必要なイワガキ種苗が十分確保できるようになったほか、県外のカキ養殖業者から種苗分譲の要望も多く、種苗生産を進めている。共同の活動で「もうかる漁業」を実感し、地域での注目度も高く、会員に励みが出てきている。



【視察研修報告】

●魚介類の加工販売について●

秋田県漁協女性部北部総括支部 ひより会 須藤 綾子

幅広い商品開発とその販路拡大を検討する中で、東京都八丈島の漁協連合女性部の活動内容やくさや加工所で情報を収集した。

●産地直売所について●

秋田県漁協北浦総括支所 青年部 鎌田 誠喜

産地での観光市や消費地での直売を実施するなど地産地消を推進して魚価向上を図るため、新潟県内の漁協直売所で販売方法や消費者の動向に関して視察研修を実施した。

【特別報告】

○蘇れ！男鹿の海第Ⅰ報～未来への贈り物 継続は炭の力～○

秋田県立男鹿海洋高等学校 海洋環境科3年 河井 尚弘・児玉美奈子・三浦 洵也
炭を利用した海水の水質浄化実験の取組。

○秋田名物“ハタハタ”を全国へ○

秋田県漁業協同組合業務部 佐藤 正明

禁漁後、増えてきたハタハタ加工新商品紹介や、今後の消費販売促進の取組。

【秋田県漁業士会活動報告】

◇平成19年度秋田県漁業士会活動について◇

秋田県漁業士会 杉本 悟

平成19年度漁業士会活動概要と直売会・水産物販売活動の報告。

【水産振興センター研究成果報告】

□ハタハタ資源調査□

海洋資源部 工藤 裕紀

平成19年の漁獲状況・体長組成・底びき網漁場・標識放流と再捕状況等について報告

□イワガキ関連試験研究の現状□

資源増殖部 齋藤 寿

漁獲量・増殖技術の現状・新たな技術開発等について報告。

【漁業士認定証授与式】

交流大会に先立ち、秋田県漁業士の認定証授与式が行われ、次の方々が新たに漁業士に認定されました。

認定者 青年漁業士 戸嶋 貴之 (北浦総括支所)

指導漁業士 武田 篤 (北部総括支所)

〃 西方 強 (北浦総括支所)



「海の森健全化技術の確立研究」について

日本海沿岸で藻場をつくるのは主にモクと呼ばれるホンダワラ類です。ホンダワラ類の葉上や根元に生育する小さなエビ類や貝類はメバルなど多くの魚類の食物になります。落葉はアワビやウニ、サザエが食物にします。さらに小さな葉の破片はイガイなどが食物としています。つまり、健全な藻場が維持されていることが豊かな沿岸漁業生産に直結すると言えます。しかし、年による海況条件の変化などによって藻場は減少し、著しい場合には消失します。場合によっては沿岸漁業生産が打撃を受けて磯焼けと呼ばれる状態になります。

このため、水産振興センターでも藻場（海の森）をつくり健全に維持する技術の開発を進めてきました。ここでは、平成14年から18年度にかけて行った“海の森健全化技術の確立研究”について紹介します。調査は、大きく「藻場をつくる技術」と「藻場を維持する技術」の2つに分けられ、「つくる技術」としては“シャワー育成によるホンダワラ類の種苗生産法”を確立することが出来ました。この方法はすでに八峰町の岩館磯まわり組合によって活用され、当地ではギバサ（アカモク）の森づくりが行われています。現在、特に男鹿で食用とされるジバサ（ホンダワラ）についても、この技術を応用して試験を行っているところです（図1、2）。

一方、「維持する技術」では、藻場に対する食害生物と言われるウニについて調べてみました。その結果、キタムラサキウニでは、藻場へ積極的に移動して、藻場を食い尽くすような現象は認められませんでした。つまり、ウニの食圧は、磯焼けの発生ではなく持続に関わっていると考えられました。試験的にはウニを取り除きホンダワラ類の発芽を保護してやることで小規模な藻場を修復することができました（図3、4）。しかし、水温や栄養塩など海況条件によっては、ウニを取り除いても回復しない場合があります。したがって、「維持する技術」については、水温や栄養塩とホンダワラ類の成長・生残との関係など、新たに解明すべき事項があると言えます。これについては、藻場の変動に対応してアワビやウニ資源を維持・増大させようとする“磯根漁場高度利用技術の確立（平成19～23年度）”において取り組んでいきたいと考えています。



図1 ホンダワラ(ジバサ)種苗のシャワー育成



図2 海底に移植されたホンダワラ(ジバサ)種苗



図3 ウニ除去前の海底

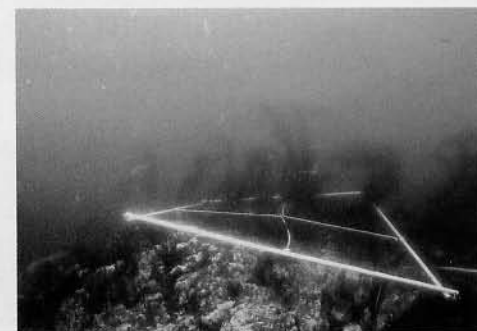


図4 ウニ除去(+アカモク卵供給)後の海底

編集後記

ある小学校の3年生から、水産振興センターの見学に対するお礼の手紙をいただいたのだが、フグを漢字で「河豚」と書いた児童がいて、感心した。でも、どうしてフグだけが漢字なの？・・・。
(担当：企画管理班)